

茅ヶ崎シニアクラブ講演

平成8年6月15日

茅ヶ崎勤労福祉会館

## 遊牧文化－モンゴル遊牧民と過ごした日々

苗川博史

### はじめに

私たち日本人にとってモンゴルは、文明とかけはなれた荒涼とした世界というイメージがある。例えば、チンギスハーン、ゴビ砂漠、遊牧など、どれをとっても荒々しく粗野で、文明果つるといったイメージである。私にとっても長い間、未知の国というかアジアの中でも近くて遠い国であった。モンゴルの情報は、ここ数年間、国内において図書<sup>1)</sup>～<sup>12)</sup>があいついで発行されている。これらの図書に共通しているのは、モンゴルが草原の国であり、遊牧民が家畜と共に暮らしているという事実である。私自身の関心は、とりわけ遊牧民と家畜に集中した。というのも、私事にわたるが、1980年より家畜羊の行動研究を開始し、これまでに国内で調査や観察を重ねてきた。いつの日にか外国の家畜羊をヒトとの関係で探究したいという問題意識を持ち続けていたからである。特に、遊牧民の中に入って、伝統的な家畜の管理や行動をこの目で見たいと思う気持ちが年々つのようになった。1993年に岩手医科大学の赤羽和夫氏から、羊の群行動に関する問い合わせがあったことを機会に、赤羽氏がモンゴルへでかけ、遊牧民のことや羊の管理などについての話をするなかで、現地の情報を得ることができた。この縁から、モンゴル国立大学のロブサンジャブ教授を紹介され、遊牧民と共に生活しながらの調査が実現する運びとなった。海外へは初めての、しかも1人旅ということで、途中冷や汗をかいたこともあったが、現地の調査では、モンゴル畜産研究所ミヤクダク博士や通訳のモンゴル国立大学生バトルグガ氏のご尽力もあり、充実したものとなった。

### 1. 草原へ

モンゴルへ向かう途中、機上から見たゴビ砂漠は、鉄錆色に地肌をあらわしていた。ここが、荒涼とした地域であることやこの先が草原であることに心を踊らせた。モンゴルの首都ウランバートルは、草原の中にあり、その空港に降り立った時、夕方5時であるというのに、陽射しがとても強く感じた。到着した日は、日没が午後10時という時間差にとまどいながら夜を迎えた。市内には、イワツバメの大群や、足元にスズメに似たラックという野鳥が近寄るのを初めて見かけた。

ウランバートル市内の街の様子は、私が少年時代に見かけた東京の光景によく似ていた。トローリーバスが走り、人々の歩く姿などは現在の日本で失われてしまった光景である。

草原へはミヤクダク博士運転によるジープででかけた。ジープには、私、ミヤクダク

ク博士の奥さんと末娘さん、それにバトドルグガ氏が同乗した。市内から30分ほどすると見渡す限りの草原だけになった。遊牧民が乗馬しながらヒツジ群をコントロールする光景があちらこちらに見られた。休憩地点ではヤクの一群を見ることができ、異国に来たことを実感した。

対向車は、幌付きの大きなトラックやバスなどヒトを多く乗せていた。途中エンストをおこしている車やガソリンが切れたらしく、行き交う車に援助を求めている人々の姿を何度も見かけた。聞くところによると、ガソリンスタンドがほとんどなく、また行程を計算せずに燃料を積んで出発するためこのようなことになるらしい。いかにもモンゴルらしいと思った。死んだウマが道路脇に横たわっていた。モンゴルでは猛禽類に食べられるままにしておくそうである。目的地はウランバートル市から約250kmにあるウブルハンガイ県ブルト村の遊牧民ホッスルワンさんとその親族の夏营地である。出発から6時間半後の午後9時半過ぎに到着した。「サインパイノー」、覚えてたのモンゴル語で挨拶を交わし、ゲル（円形テント式住居）の中へ入った。ミヤクダク博士とホッスルワンさんは兄弟の関係でありながら、嗅ぎタバコで互いの親交をはかっていた。その後、小さな器に注がれたモンゴルアルビを右手親指と薬指で天にはじきながら何かを唱えていた。内容を聞いてみると、①天のために②土のために③ここにいる人々の健康と幸福のためにということであった。さらにスーアルビという牛乳のアルコールが出され、最後にアイラグという馬乳酒がどんぶり一杯に注がれた。私は飲み慣れないアイラグを少しづつ飲み干した。

翌朝、ゲルから出ると昆虫の羽根音が気になった。ザルツアーという赤色の羽根をもった昆虫が地上1～2mのところを上下し、羽根音をたてながら飛んでいたのである。

## 2. ゲル生活

着いた日の翌日、私のためにゲルを設営してくれた。入り口は、すべて南側と決まっているという。これは風よけのためであるらしい。設営の日は、ホロスコープでいうと縁起が良いとのことであった。設営は、ゲルの中心にホッシュという木を立て、チラスという樺を組み合わせ、周囲を厚い布地のテーブル（上側）・トウリツ（下側）と薄い布地のブレース（外側）・クシク（内側）で巻き付け半日で完成した。ゲルの大きさは直径が6m、高さが2m20～30cmあった。中央の天井部には穴があいており、ストーブを焚くときの逃げ窓のようにになっている。この逃げ窓は夜間や雨天時に天幕で閉じる。ゲル内にはベッドと絨毯があるだけである。ゲルの中は日中涼しく、また風雨にも強く、快適であった。モンゴルの遊牧民は、新しいゲルをたてた後、民族衣装の新しいデールに身をまとい儀式を行う。私が初めてこのデールを着たとき、老婆が次の順序で呪文を唱えた。南側からデールを右手前へ手で引き①「子ウマを踏む」、北側からデールを右後へ手で引き②「ヒツジを踏む」、デールを内側に引き③「手と口の脂肪を踏む」。それぞれにいわれがあるらしい。このあとにモンゴル紙幣を渡され、シミンアルビを親指と薬指とで3度はじて飲み、儀式は終わった。

ゲルの中で、遊牧民はホルダッホという日本のじゃんけんに似た指を使う遊びを頻繁に行っていた。その遊びは、2人が同時にそれぞれの5本指の1本を出し、勝敗を競うのである。親指は人差し指に勝ち、人差し指が中指に勝つというように、3回行って勝ち負けを決めるのである。負けた方は、馬乳酒（アイラグ）を飲まされる。大人達がこの遊び

を行うときには、何かを唱えながら指出しをしていた。また、遊牧民はよく歌を唱う。日本の民謡のような抑揚で子供も大人も唱っていた。歌の内容を尋ねると、母に関するものが一番多く、次いでウマ、3番目に父に関してのものであるという。母の存在は偉大なのだろう。高校時代に読んだパールバックの「大地」を思いおこした。日本の歌を聞かせてくれというので「サクラ」、「春」、「知床旅情」などをうたった。ロウソクを灯して唱うゲルの夜は、いつしか学生時代にテント生活をして友人達と過ごした日々と重なった。毎晩寝る前にテントの外へでて見たテンジンザウルス（天の川）は、手に届きそうで圧倒された。こんなきれいな星を眺めたのはおそらく生まれて初めてである。どの星も近くに感じた。

### 3. 遊牧民の生活

現在、200万人のモンゴル人口のうち、約3割の60万人が遊牧民であるという。このうち、家畜の所有規模2000頭が数%、1000頭が5~10%、500~600頭が60~70%、50~100頭が20%であるという。1992年の民主化後、遊牧民の数は、確実に増加傾向にあり、意欲的に生活を送っているという。遊牧民は家畜をととも大切にす。生活の糧であると同時に、特にウマは男達の生活の足でもある。モンゴルの草原では、5家畜とよばれるウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダが飼養されている。ウシが11%、ウマ8.9%、ヒツジが51.4%、ヤギが27%、ラクダが1.3%であり、中でもヒツジ・ヤギが多いことに気づく。都市部では、ブタやニワトリを飼育しているという。ホッスルワンさんのところでは、ヒツジが560頭、ヤギ120頭、ウマ78頭、ウシ30頭をそれぞれ放牧管理していた。モンゴルの季節は、春が3~5月、夏が6~8月、秋が9~10月、冬が11月~2月であり、遊牧民は季節ごとに家畜と共に住居を移動する。遊牧民の1日は、午前6時30分頃に始まる。女達は、先に起きてウシの乳をしぼる。男達は、女達のあとに起きて、ウマ群を連れ戻しにでかける。男達がウマ群をキャンプ地に連れ戻した後、女達がウマの乳をしぼる。乳しぼりは、全て女達の仕事である。ウマの乳は1日5~6回、ウシの乳は朝夕2回しぼる。いずれも手作業である。1頭のウマから5ℓくらいの乳をしぼりする。7月上旬から10月上旬までの間行なうそうだ。しぼった乳は、飲むこと以外にチーズ・バター・ヨーグルトづくりを行う。ウシは2月まで、ウマは9月まで乳をしぼる。遊牧民は、子供から大人までじつに良くアイラグ（馬乳酒）を飲む。飲むというより食べているように私には思えた。毎日、大人10ℓ、子供2ℓ飲むという。このアイラグは、1日3000回も棒で攪拌して作るそうだ。1回1秒の間隔で数えて行なうという。気の遠くなる仕事である。仕事や儀式、遊びのあとに必ず飲んでた。期間中、他のゲルを訪れた時にも、湯皮に似たウルムという乳製品と共にアイラグが出された。もてなしの料理はタドガシールというヒツジの頭の肉料理であった。ヒツジの肉をカットするのは、家族の中で年長者が行い、若い人のカットは認められない。モンゴル人は正月にこの料理を食べるといふ。肉の各部それぞれに食べる人の区別や慣習があることを教えてくれた。それによると、耳は子供に与える。上顎は娘のみであり、将来子供を産むために遺伝するからだという。2つの眼球は、1人の人だけで食べなければならないという。もし、1つしか食べないと目が悪くなると遊牧民はいふ。鼻は食べない。食べればいつも鼻水がでるからだという。また、バトルホックという頭部は食べない。もし食べれば獣が近づ

いて強い動物と出会い、大変危険だからだという。このように食に関する言い伝えやタブーのような慣習が残されていることを知った。

遊牧民は、夏の時期、草原の哺乳動物「タルバガン」を狩猟し食べる。ロシア製の銃で50mほどの距離から穴から出て立ち上がっている状態のタルバガンをねらい撃ちする。解体し肉裁きする手際よさはみごとである。石焼きにして食べるこの料理はポートグとよばれる。私も期間中に3度口にする機会があったが、とてもおいしかった。遊牧民は、時計やカレンダーがないかわりに太陽や月の位置によって、月日、仕事の段取りやヒトとの約束をする。このことは私にとって大きな驚きであった。また、遊牧民は、どの時間にヒツジ・ヤギ群がいるかを知っている。そのことは、遊牧民の熟練によるものであるという。季節を通して家畜とヒトは山のふもとにいる。山のふもとは、草が良いからである。夏の寒い日は、ゾッホ（ストーブ）を焚く。燃料は草原にあるウシの糞の乾燥したダンというもの他、ポッロガスやアルツという枯れ木を使う。家畜の糞の中でもウシが一番火力が強いとのことである。糞拾いは女・子供達の仕事である。期間中に、ヒツジが2頭オオカミに襲われた。殺されたヒツジは、群れから離れ足の速い個体であった。オオカミを見たヒツジの中で、足の速い個体は群れから先に飛び出す。オオカミは2～3度襲ったらしい。ヒツジは廻りながら移動、ノドを噛みきられたらしく即死状態であった。オオカミに食べられなかったのは、遊牧民のイヌによって守られたからであるという。15歳になる遊牧民の少年に現在の生活や将来のことについて聞いてみた。6～8月は家族と共にゲルで過ごし、9月～1月は、ここから45km離れたサンサル村の学校寄宿舎に入って勉強する。冬休みが1～2月で再び家族の元へ行き、2～5月は寄宿舎へ戻って勉強するとのこと。休みが長いのは、遊牧生活する国民ならではのこららしい。ツンツエルン君という名の少年は、遊牧生活よりも学校生活の方が楽しいという。それは友達と会えるからだという。しかし将来は遊牧民になるという。モンゴルの家畜は全て好き。特にウマが好きである。何故ならウマは速いし、どこかへ行くことができるからだという。学校では、特にスポーツ、歴史、文学が楽しいと話してくれた。日本についてどれくらい知っているか尋ねてみた。アジアの中の島国であること、相撲はTVで、侍のことはシネマで見た。TVゲームはウランバートル市内でしたことがある。日本の子供たちが今、何をしているのか知らないと話してくれた。

#### 4. 家畜の管理

現地では、ミヤクダク博士の指導の下、ホッスルワンさん所有のヒツジ560頭、ヤギ120頭、合計680頭を対象に、それらの行動と遊牧民によるヒツジ・ヤギ群の管理を観察した。遊牧民が、ヒツジ群の中にヤギを入れて管理することは、ヤギがヒツジ群をリードする習性を利用して古くから行われている方法である。ヤギはヒツジ群の中に約20%いるとヒツジ群を管理しやすいという。移動中は、たいていヤギが先頭を歩く。ヤギの行動を見て、ヒツジ群も動く。ヒツジ・ヤギ群の混在の時は、速いヒツジは遅いヒツジ達をリードするなどの影響を与える。ヤギはクールな天候の時に影響を受け、ゆっくりと動く。ヤギが先頭に行き、天候が悪いとヒツジ群の後を歩く。毎朝、ヒツジ・ヤギ群は、キャンプ地から放牧地へ誰から指示されることなく出かける。先頭はヒツジ群、後部はヤギ群である。毎日、だいたい行く方向は決まっているようだ。スタートするきっかけは、

前日の食草量によって、また、天気によって異なるという。暖かい日は出発が速く、寒い日は、出発が遅い。出発後の3時間は、食草に費やし、その後、1～2時間休息し反趨する。休息時間は、暖かい日が2～2時間半、寒い日は30分～1時間くらいである。再び移動しながらの食草そして水場へ行き、休息する。群の形が扇形になるときは、天候の状態がほど良いときだそう。風の強くないときは、ゆっくりと、しかも遠くまで出かける。また風が強くて涼しい時も、遠くまで行く。風が1方向で変化しないときなども遠くへ行くらしい。ヒツジ・ヤギ群は山風に対してすすむ傾向にあるが、時間が遅くキャンプ地に戻れる距離にあるときは、山風があっても山の方へは移動しない。日中の気温上昇時には、ヤギはヒツジのように集結しない。集まると暑いということを知っているからだという。ヤギが何故外側に固まっていることが多いのか尋ねた。ヒツジの中にいると暑いので風の方向へ位置する。しかも外側は涼しいという。ヤギはヒツジよりも暑さ寒さに弱い。ヤギは寒いときには、一番先に帰ってくる。

ヒツジ・ヤギ群は、1日5 kmから10 kmの距離を移動して歩く。キャンプ地に戻るのには、午後9時30分頃から10時の間である。帰着時は、ヤギ群が先頭である。群の速度は、季節、牧場、草の状態によって異なる。食べる草がないときは、早く移動する。草が豊富であれば、ゆっくりと移動する。新しい草を求めて移動する。朝、多くの草を食べるのは、お腹が空いているためであり、移動も速い。夏に草を沢山食べると冬に病気にならない。春には、風などの病気になりやすいという。一度病気になったヒツジは死ぬという。ヤギは傾斜地を好んで登る習性がある。約0.1～0.2 km/hの速度で移動する。その日の天気によって行く方向が異なる。例えば南風の時は、北へ向かう。雨と風・雪が西からの時は東へと移動する。

先頭は、中堅くらいの年の個体が多いという。ミヤクダク博士によるとモンゴルのヒツジ群の形は夏には小さく、丸くなるという。円の短形が進行方向になる丸形になるという。夕方、ヒツジ・ヤギ群がキャンプ地の近くで休息することがある。満腹状態の時は、動かない。日中に彼らが動かないのは、食べるのに適当な日であること、寒くもなく暑くもなく風が強くないこと、草の状態が良いことなどであるそう。夕方近くに、ヒツジ・ヤギ群は満腹で疲れているとき、風がないときにキャンプ地へ戻るそう。雨の日、水は飲まない。草に水を含んでいるからだ。晴天の日は、午後に飲みに行くことが多い。遊牧民は、双眼鏡でヒツジ・ヤギ群を制御する。ヒツジ・ヤギ群の姿が見あたらないときや他の遊牧民のヒツジ群と混合しそうなとき、夕方なかなかゲルに戻って来ないときには、ウマに乗ってコントロールする。夏はヒツジ群をほとんど制御しない。遠くへ行ったときはパトロールしながらの介入がある。遊牧民は遅いヒツジに対しては「チャー」というかけ声で介入行動をする。つまり群形をかえてやる。ヤギのみを呼ぶときは、「ズーズー」という。遊牧民がヒツジ・ヤギ群に対して介入行動する時、多い群に対して移動させるときには「キシキシ」、少ない群に対して移動させるときや集めるときには「チャー」という発声をする。いずれも後部からウマで行動を制御した。7人家族位の遊牧民にとって、500～600頭のヒツジ・ヤギ群は規模としては、最適であるという。通常、300頭位の規模が、人数に関わらず家畜を管理しやすいという。500頭近い規模であると移動するにも群形も変形しやすいという。

モンゴルの草原では、過放牧はありえないという。草原は国有地であり、草は自然な状

態で管理する。遊牧民は同一県内での移動は可であるが、他県への進出はできないなど、土の法律が定められているという。時々、場所をめぐって遊牧民同士で小競り合いがあるという。

#### おわりに

遊牧民と共に生活しながらの約3週間は、2度とない素晴らしい体験となった。通訳者としてモンゴル国立大学生のバトドルグガ氏にはたいへんお世話になった。とても優秀な学生で、英語歴は大学入学後の2年間、日本語歴は約8ヶ月というのに関わらず、とても流暢な英語と日本語を聞かせてくれた。

また、ミヤクダク博士の奥さんには、毎日の食事のお世話になり、調査に専念できたとしたら、彼女のおかげである。

日本に戻って感じたことは、物があふれ、食がいつでもどこでも何でも手に入るという便利さ、ぜいたくな生活などである。この時代にモンゴル遊牧民のように家畜を生業にし、文明から離れた生活をしている人々がいることを特別な思いがして、今回のモンゴル調査をふりかえってみた。

民主化3年後のモンゴルをこの目で見、耳で聞き、予想していたことよりも数多くのことを学んだ。今回、モンゴルのゆったりとした時間の流れに身を置き、真のゆとりの時間を持ち得たことを関係機関に感謝したい。

#### 文献

- 1)一之瀬恵,モンゴルに暮らす,岩波書店,1994.
- 2)小澤重男・鯉淵信一,モンゴルという国,読売新聞社,1992.
- 3)金岡秀郎,モンゴルまるごと情報局,トラベルジャーナル社,1995.
- 4)川合宣雄,モンゴル悠遊術,第三書館,1993.
- 5)小長谷有紀,モンゴル万華鏡,角川書店,1992.
- 6)椎名誠,草の海—モンゴル奥地の旅,集英社,1995.
- 7)杉山正明,大モンゴルの世界,角川書店,1992.
- 8)高松秀一,ジンギスカンの国へ,丸善,1992.
- 9)地球の歩き方編,モンゴル95~96年版,ダイヤモンドビック社,1995.
- 10)日本モンゴル友好協会編,モンゴル入門,三省堂,1993.
- 11)野沢延行,獣医さんのモンゴル騎行,山と溪谷社,1994.
- 12)小長谷有紀,モンゴル草原の生活世界,朝日選書,1996.

研修先：モンゴル国立大学，モンゴル畜産研究所

研修期間：1995年8月6日～26日

指導教授：ロブサンジャブ教授，ミヤクダク博士

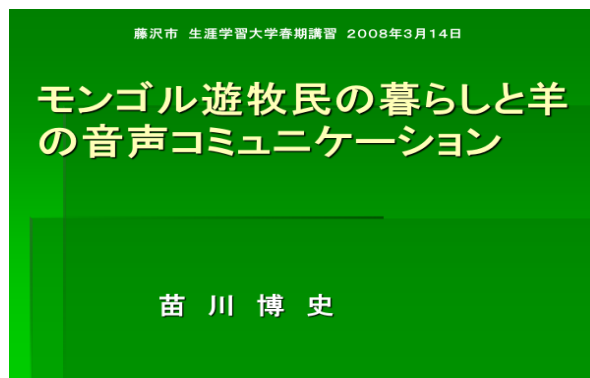
演者連絡先：〒253 茅ヶ崎市赤羽根524-2

TEL/FAX 0467-54-5328

苗川博史（なえかわ ひろふみ）

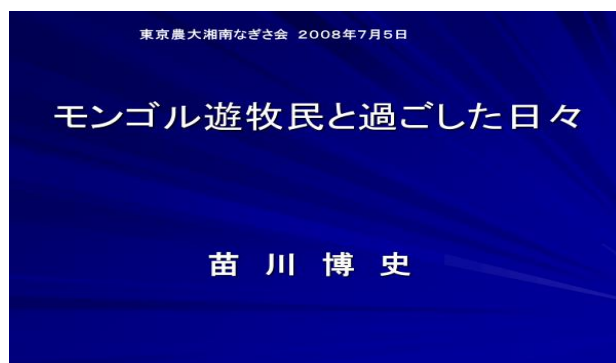
●モンゴル遊牧民の暮らしと羊の音声コミュニケーション. 藤沢市生涯学習春季講座.  
2008.3. 14. 講演

120 枚の slide を通して、これまでのモンゴル調査のうち、遊牧民の暮らしと羊の音声（鳴き声）によるコミュニケーションの知見を紹介した。



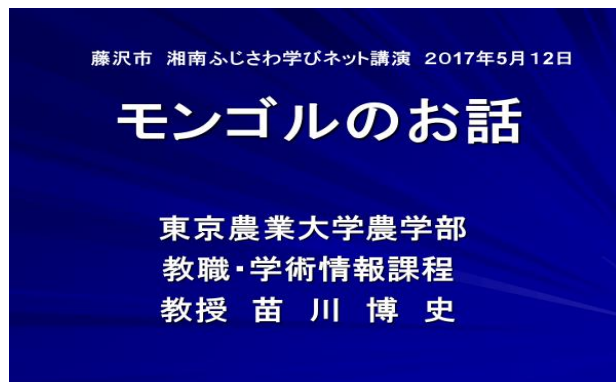
●モンゴル遊牧民と過ごした日々. 東京農大湘南なぎさ会. 2008.7.5. 講演

84 枚の slide を通して、これまでモンゴル国において遊牧民と過ごした日々について紹介した。



●モンゴルのお話. 藤沢市湘南ふじさわ学びネット. 2017.5.12. 講演

122 枚の slide を通して、モンゴルの概要、歴史、民族、風土、遊牧民の衣食住生活のことなどを講演した。



- モンゴル遊牧民と過ごした日々. 東京農業大学オープンカレッジ. 2018.1.25 講演  
161 枚の slide を通して、これまでのモンゴル遊牧民と過ごした日々について紹介した。



- モンゴル遊牧民による羊・山羊への介入と羊・山羊の放牧行動. 東京農業大学オープンカレッジ. 2018.7. 29 講演  
102 枚の slide を通して、これまで調査してきたモンゴル遊牧民による羊と山羊群への介入行動および羊と山羊の放牧行動の特徴について紹介した。





## モンゴル遊牧民と過ごした日々 I

苗川 博 史 (Hirofumi Naekawa)

湘南工科大学附属高等学校

### 1. はじめに

筆者は、平成7年から11年の8月期にモンゴル遊牧民の夏営地を訪ね、延べ70日間、ゲル（移動式円形住居）で生活しながらヒツジの行動調査を行った。調査結果については、学会・研究会等で報告しているのですが、ここでは現地での生活の様子をまとめてみた。

### 2. ゲルへ

遊牧民による伝統的なヒツジの管理や行動をこの目で観察してみたいという夢が、モンゴル遊牧民と過ごすことで実現した。北京からモンゴルへ向かう途中、機上からみたゴビ砂漠は、鉄錆び色の地肌を現わしていた。この先、果てしなく続く荒涼とした砂漠に生息する生き物や草原に思いを馳せ、心が高鳴るのを感じた。モンゴルの首都ウランバートルは、草原のなかにあり、空港に降り立ったとき、夕方5時であるというのに陽射しがとても強く、濃紺の空に流れ行く大きな雲が印象的であった。草原には共同研究者のミヤクダク博士とその家族、モンゴル国立大学のバトドルグガ氏（現ウランバートルポスト）が同行した。市内から車で30分すると、見渡す限りの草原だけが変わった。遊牧民が乗馬しながらヒツジ群を制御する光景があちらこちらにみられ、休息地点ではヤクの一群をみることが出来、異国にきたことを実感した。

ウブスハンガイ県ブルト村の遊牧民ホッスルワンさんとその家族の夏営地に着いたのは、薄暮時の午後9時半であった。「サインバイノー」、覚えてたのモンゴル語で挨拶を交わし、ゲルのなかへ入った。ミヤクダク博士とホッスルワンさんは、兄弟関係でありながら喫ぎタバコで互いの親交を図っていた。その後、小さな器に注がれたモンゴルアルヒ（ウオッカ）を右手親指と薬指で、天にはじきながら何かを唱えていた。聞いてみると、①天のために②土のために③ここにいる人々の健康と幸福のためにということであった。さらに、スーアルヒ（牛乳酒）が出され、最後にアイラグ（馬乳酒）がどんぶり一杯に注がれた。私は、飲み慣れないスーアルヒとアイラグを少しづつ飲み干した。翌朝、私の宿泊するゲルを設営してくれた。ゲルの入り口は、すべて南側に決まっているという。これは、風よけのためであるらしい。設営の日は、ホロスコープでいうと縁起が良いとのことであった。設営は、ゲルの中心にホッシュという木を立て、ナラスという棒で組み合わせ、周囲をフェルトと布地で巻き付け、約3時間で完成した（写真1～3）。ゲルの直径は6m、中心部の高さが2m30cmあった。中央の天井部には、ストーブを焚くときの煙の逃げ窓のような穴があり、夜間や雨天時には閉じて



写真 1 ゲルの中心部と周囲



写真 2 ナラス（棒）で中心部と周囲を組み合わせる。



写真 3 フェルトと布で巻き付ける。

いた。

### 3. 遊牧民の慣習

遊牧民は、ゲル設営後に民俗衣装のデールを身にまとい儀式を行った。私も生まれて初めてデールを身にまとい儀式に加わった（写真4）。1人の老婆が、デール姿の私を南側から右手前へ、北側から右後ろ側へ、最後に内側に手で引いてくれた。これには、「子ウマ



写真 4 ゲル内での儀式

を踏む」, 「ヒツジを踏む」, 「手と口の脂肪を踏む」という意味があることを教えてくれた。もてなしの料理としてタドガシールというヒツジの頭部を茹でた肉料理が出された（写真5）。ヒツジの肉をカットするのは、年長者が行い、若い人のカットは認められない。肉の各部にそれぞれ食べる人の区別や習慣があることを教えてくれた。それによると、耳は子供に与える。上顎は娘のみであり、将来子供を生むために遺伝するからだという。二つの眼球は、1人で食べなければならないという。もし、一つしか食べないと目が悪くなるという。鼻は食べない。食べればいつも鼻水が出るからだという。また、バートルホックという頭部は食べない。もし食べれば、獣が近づいて強い動物と出会い、大変危険だからだという。このように、食に関する言い伝えやタ



写真 5 タドガシール（ヒツジの頭部料理）



写真 6 ホルダッホ遊び

ブーのような慣習が残されていることを知った。

#### 4. 遊牧民の生活

遊牧民の生活は、家財道具が増えることもなく質素であった。必要最低限の生活用具しか所持しない。ゲル内には、簡易ベットとわずかな生活用具があるだけである。また、ゲルには電気、ガス、水道、バス、トイレがない。毎日の生活用水としての水は、近くの小川の水を汲み調達する。その水で顔や体を洗い、口をすすぎ炊事を行った。炊事や暖房の燃料には草原の枯れ木とウシの糞を用いていた。家畜の糞のなかでは、ウシが一番火力があるからだという。トイレはゲルから少し離れた草原上に、各自が日々場所を変えていた。ステップ型気候に位置するモンゴル草原は、家畜・ヒトの排出物がすぐ乾燥してしまい、においは感じなかった。牧畜が、植物-動物-ヒトという自然界の循環機能のなかで実に合理的に営まれていることが分かる。遊牧民の食生活は、肉と乳製品であり、特に子供から大人まで実に良くアイラグを飲んでいった。飲むというより食べているように私には思えた。夏の季節には、毎日、大人10l、子供2l飲んでいるという。冬の季節、肉製品の毎日で疲れた胃袋を乳製品で癒すためらし

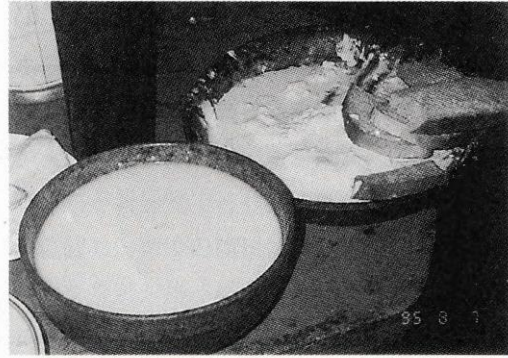


写真 7 アイラグ (左)



写真 8 タルバガンのボードク料理

い。仕事や儀式、またホルダッホというジャンケン遊び (写真6) の後には必ず飲んでいった。私が初めてこのアイラグを口にしたとき、カルピスにアルコールを混ぜたような何ともいえない酸っぱい味がして、とてもではないが飲めなかった。しかし、健康に良いということを知られ、滞在中には、必ず口にした。アイラグは、日中搾った馬乳をゲル内の樽のなかに入れ、棒で何回も攪拌して出来る発酵食品である (写真7)。滞在中、遊牧民は、草原のプレリードックに似たタルバガンという哺乳動物を狩猟し、その肉を石焼料理にするボードク料理 (写真8) を私に食べさせてくれた。ヤギやヒツジの肉料理の毎日のなかで、このタルバガンのボードク料理は何故か心に残った。

(つづく)

## モンゴル遊牧民と過ごした日々 II

苗川博史 (Hirofumi Naekawa)

湘南工科大学附属高等学校

### 5. 遊牧民の季節移動

平成8年春にモンゴル各地で発生した火災の多くは、キャンパーによる火の不始末が直接の原因であったという。都市部のほとんどの生活者は、夏になると一時的にせよ、郊外に出かける。都市部の経済生活が厳しいということも反映していると考え、モンゴル民族のなかに定住しない遊牧生活に染みわたっていることを感じる。いずれにしても、この火災の多くの原因を考えたとき、モンゴルでは近代化と共に、人々がここ数年自由に国内の各地を移動し始めていることを、知ることが出来た。

この年の遊牧民の夏営地は、草原の火災の影響はなかったものの、春から続いた乾燥小雨のため、前年の場所から北西方向へ約10kmの他県へ移動していた。遊牧民には、定住地がない。季節ごとに家畜と共に良質な草を求めて住居を移動するから定住地がないのは当然であろう。草原の移動はこれまで同一県内と決められていたが、他県へ移動出来る法律が改正されたらしく遊牧民の移動範囲が拡大した。住所が定かでない遊牧民の居所を突き止めるのは容易なことではない。郵便物は、まず届かない。代理人に依頼して届けてもらうしかない。前年に撮影したスナップ写真は、遊牧民のゲルの写真棚に収められて

いた。同行したミヤクダク博士が届けてくれたのだという。これまで移動したゲルを訪ねた際には、途中で何人もの遊牧民に居場所を聞きながら、ようやくたどり着いたという思いがある。私たちが、夏営地を訪ねた際、遊牧民は、訪ねる人物の名前を聞いて「その人ならこの方向に住んでいる」と居場所を知っていたのには驚きだった。しかもそのゲルから十数kmも離れていたのにもかかわらずにである。おそらく、乗馬しながら生活する遊牧民にとっては日常の行動範囲のなかに訪ねた遊牧民も含まれているものと思えた。

### 6. 遊牧民の少年少女たち

調査の合間に、遊牧民の少年少女たちに現在の生活や将来のことについて聞いてみた。16歳の少年は「友人と会えるから、遊牧生活よりは学校生活の方が楽しい。しかし、将来は遊牧民として生活したい」という。滞在中に出会った遊牧民の少年たちのほとんどが、将来は遊牧民として生きて行くことに誇りをもっていた。彼らは、モンゴル家畜のなかでウマが大好きである。ウマは速いしどこへでも行くことが出来るからだという。遊牧民の少年少女から大人まで、ウマは大事な生活の足であり、食肉にすることはなかった。モンゴルの教育のことや遊牧民の子供たちの生活のことが気になったので、さらに聞いて

みた。家族と共にゲルで過ごすのは、1～2月と6～8月であり、ほかの月は家族と離れ、学校寄宿舎に行き過ぎて勉強するという。学校生活のなかでは、歴史、文学、スポーツが楽しいという。日本のことについては、アジアのなかの小さい国であること、日本の子供たちが今、何をしているのか知らないと話してくれた。相撲のことはウランバートル市内のテレビで、侍のことはシネマで見て知っていた。テレビゲームもウランバートル市内で遊んだことがあるという。遊牧民の少年たちは、年に何回かはウランバートル市内へ出かけているようだ。こうした都市部の影響を幾度か受けていると、遊牧生活を継続していくのが難しくなるのではと感じた。17歳の遊牧民の少女は、現在の遊牧生活は厳しく、将来は科学者を志し、大学進学を考えているという。次世代のなかには、遊牧生活するもの、都市部へ出て生活するものと二極化していくと思われた。今後、モンゴルが近代国家へと脱皮し、都市部と地方都市との間で人々の往来が激しくなったとしても、乳と肉製品の食習慣で支えられている国民性が続く限り、遊牧民は再生産され続けていくことだろう。現在、経済不況で国内が揺れているモンゴル国内は、観光客対象の通訳の仕事が若者の間で急上昇である。特に日本語に対する関心はすさまじいものがあることを同行したモンゴルの大学生から聞くことが出来た。

### 7. 遊牧民による宴

滞在中、行動観察の時間外には、薪拾いや水汲み、家畜の管理作業を手伝ったほか、ミヤクダク博士の甥に当たる遊牧民の結婚式に招待されたことがあった。訪れた8月は、遊牧民の結婚が集中する季節でもある。これ

は、遊牧民の生活サイクルのなかで、また、その後の子育てにも好都合なのだという。式・披露宴は、隣の村の真新しいゲル内で行われた。ゲルの入り口から向かって左が新郎側、右が新婦側であり、新郎の左隣にラマ僧が位置し、彼等の前には、ヒツジの頭肉や固いパンなどが堆く積まれていた。私たちがゲルに着いたとき、総勢40～50人が集まっていただろうか。参加者は新郎新婦に近いところから年齢順に座っていた。すでにラマ僧からの祝詞が終わり、宴は、アルコールを全員が飲むことから始まった。その後、参加者全員から新郎新婦に思いのプレゼントがあり、頬を寄せたり、一言二言何かを囁いたりしていた。一人の遊牧民が長い詩を朗読した。ゴイモン（うどん）を一同で食べた後は、参加者からの歌が切れ間なく続いていた。祝歌は、新郎新婦が将来の生活について、参加者のそれは、ウマ、野生動物、母、祖母についての内容のものであり、全員が唱和しゲル内に響きわたった。

宴は、歌とアルコール、新郎新婦に捧げる祝詞が7日間も続くというから驚いた。宴は、来るもの拒まずで、誰でも何時でもゲル内に入っても良いことになっている。もし、他人がまったく知らない宴のゲル内に飛び込んで



写真9 結婚式・披露宴に集まった人たち

も歓迎してくれるというあたり、習慣とはいえモンゴル人の懐の深さを感じた。休憩時にゲルの外へ出て記念写真を撮ったが、ゲル内にこれだけの人たちが集まっていたのには驚いた(写真9)。何人かの遊牧民が「日本人を見るのは初めてだ」といって私の近くに集まってきた。彼らの眼差しや表情に過ぎ去った日の日本人の姿が重なった。特に少年少女たちの顔を見て、私が少年時代を過ごした頃を思いだした。

#### 8. 遊牧民によるヒツジの制御

訪れた夏営地の遊牧民は、5人家族で構成され、ヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシを飼養していた。モンゴル遊牧民の所有規模としては、標準の頭数を維持していた。遊牧民の1日は、日の出と共に始まる。女たちは先に起きてウシの搾乳作業をする。男たちは、ゲルから遠く離れたウマの群を捜しに出かけ、ゲル近くまで連れ戻した後、搾乳作業をする。朝から晩まで大人も子供も実に良く働く。日中は、燃料集めから牧畜の管理作業、炊事などで、日の入りと共に作業を終了し明日に備える。すべて自然態で日々が終わる。毎朝、ヒツジはヤギと共にゲルから草原へ、誰から指示されることなく食草のため移動していく(写真10)。柵のない遊牧生活は、自由気ままに移



写真10 ゲルから出発するヒツジと後続するヤギ



写真11 遊牧中のヒツジ・ヤギ群

動して行くように見えるが、遊牧民によって途中制御されてゲルに戻ってくる。ヒツジのなかにヤギを入れて管理することは、ヤギがヒツジ群をリードする習性を利用して古くから行われている方法である。ヤギは、ヒツジのなかに約2割いると群がまとまりやすいという。遊牧民は、ゲルから双眼鏡で移動中の群を観察し、時折、「ピー」と口笛を吹いたり、「チャオー」というかけ声で群の向きを変えたり、休息中の移動を促していた。群の姿が見当たらないときや他群と混合しそうなときには、乗馬して出かけ、群の後部から制御していた。観察中、遊牧民の家畜ごとに対するかけ声が異なっていることに気付いた。ヒツジに対しては、「チャー」、ヤギに対しては「ズーズー」と使い分けていた。いずれも大群に対しては、「キシキシ」、小群に対しては、「チャー」というかけ声であった。これらは、移動させたり、集合させるための機能をもっているらしい。ヒツジの群を見ていると実に美しいと思うことがあった。「美」という漢字のなかに、「羊」が存在することを考えた。「羊」が「大」群になると「美」になる(写真11)。この「美」という漢字を最初に作った人はおそらく「羊」を観察して考え出したのだろうと想像した。(つづく)

## モンゴル遊牧民と過ごした日々 III

苗川博史 (Hirofumi Naekawa)  
湘南工科大学附属高等学校

### 9. オオカミの存在

モンゴルでは、過去10年ほどで遊牧民の数が3倍以上増加し、家畜頭数も900万頭増加した。ヒツジやヤギの増加は、ほかの草食動物の生息域を狭め、結果として被食者である草食動物にありつげなかつたオオカミがヒツジを捕食しにやってくるとの見方がある。陸上生態系における食物網の上位に位置するオオカミは、被食者の変動に影響される面があるのかもしれない。モンゴルでは、オオカミに対する敵意と悪感情は遊牧民に共通していると思われる。遊牧民は、ゲルの周囲にオオカミ除けの案山子もどきのものを立てたり、モンゴル犬に見張り番をさせるが、オオカミは間隙をぬって奇襲をかけてくる。ゲル近くのパドックの柵上にはオオカミ除けのお守りがかけられていた。

滞在した遊牧民のヒツジが、オオカミに襲

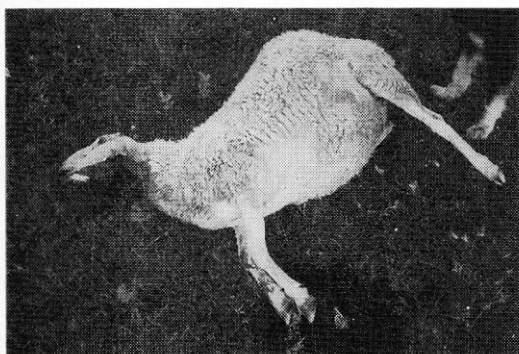


写真12 オオカミに殺されたヒツジ

われ、噛み殺されるという場面に2度遭遇した。夜行性動物であるオオカミは、日中、山中の穴で昼寝しているが、深夜になるとゲル近くまで彷徨してきて主にヒツジを襲う。冬には昼間に出現することがあるらしい。深夜、番犬のモンゴル犬の吠え声が連続的に激しくなってくると、遊牧民は、ゲルの床から飛び起きてオオカミがヒツジの群に接近していることを警戒する。さらに就眠中のヒツジとヤギの群れが、ゲルの周囲を駆け足で逃げる音が聞こえると、オオカミが特定の個体を襲い始めている。遊牧民は、声を出したり銃の空砲でオオカミを追い払うのだが、ときには犠牲のヒツジを出すこともある。翌朝、オオカミによって喉を噛み切られて殺されたヒツジが草原に横たわっていた(写真12)。後日にも尾を食いちぎられたヒツジを見かけた。足の早い個体が群れから飛び出たところを狙われたらしい。オオカミは足の早いヒツジが肉質の良いことを知っているのだろうか。それとも群れから飛び出た特定の個体を単純に狙うための作戦だったのだろうか。襲われたヒツジがオオカミに食べられなかったのは番犬に守られたからだという。襲われたヒツジの傍には番犬が座っており、ほかの捕食者から守っていた。私自身、オオカミを直接目撃することは出来なかつたが、ブルト村

でオオカミを何頭も撃ち殺したという遊牧民に骨と毛皮を見せてもらった。また、調査中の砂地にオオカミの足跡があるのを同行したミヤクダダク博士に教えてもらった。オオカミの存在は、遊牧民が自然のなかで生きていることを実感させてくれた。

#### 10. 草原の野生動物たち

調査中には、日本国内ではとうてい見られない珍しい野生の動植物や、数多くの白骨化した動物の死体を見かけた（写真13）。遊牧民の死生観は、このような光景を幼少の頃から日常的に接触していくなかで、ごく自然に熟成されていくものと思われた。

ステップ型植生の草原には、猛禽類が多い。ウマの死体の周囲にはモンゴルでタス（ワシ）と呼ばれる大型の猛禽類がどこからともなく現われ、群がっていた。鳥類ではゲル近くにエレ（トビ）、カササギに似たシャーツガイ、ヒマラヤ越えするトゴロウ（アネハツ）、それに何とスズメ（ボルショウワ）、カラス（ヘレ）、ドバト（ダクター）がモンゴル草原にも存在したのには驚いた。なかでもモンゴルカラスの鳴き声がゲーゲーと聞こえたのには興味をもった。樹林帯ではヤトオ（ライチョウ）を見かけた。昆虫類では、ザルツアという赤い羽色をしたバッタの仲間

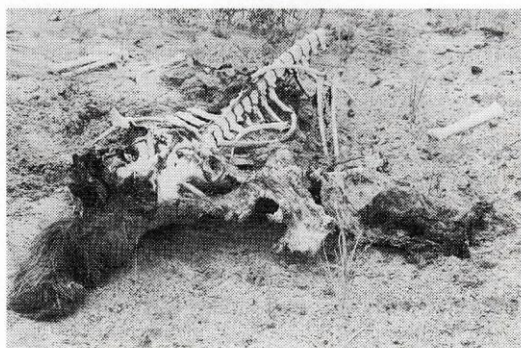


写真 13 草原に横たわる白骨化したウマの死体

が羽音をたてながらゲル近くで飛んでいたのを記憶している。アブやハエは食事中や調査中に多く見かけた。アリッグソルゴージュ（アリ）、デルウエッヘ（ガ）も多い。草むらを歩行するゴリョウは丸まった愛敬のある昆虫であり、中国では食用にするという。両生類は雨上がりの水たまりにネリッヒ（カエル）が、爬虫類ではサバクトカゲ、エレンモゴイ（ヘビ）が見られた。哺乳類では、食用にするタルバガン（プレリードック）、ウネック（キツネ）、ホルガン（小型のネズミ）、トーライ（ウサギ）を何度も近くで見かけた。

#### 11. 草原で出会った遊牧民たち

滞在中、遊牧民から「馬に乗ってみませんか」と声をかけられた。学生時代に乗馬した経験がここで活かされるとは夢にも思わなかった。「チュー」というかけ声一つで前進することを教わった以外は、自分で手綱をさばいた（写真14）。モンゴルヒツジにも日本人の心が通じたようで、この日は遠方まで乗馬して調査を行うことが出来、多くの遊牧民と出会った。

ヒツジを制御中の少年少女たち、草原から約45kmあるサンサル村（人口2,000人）まで出かける親子や夫婦、少年たち、読書中の少女とも出会った。遊牧民たちは必ず、双眼

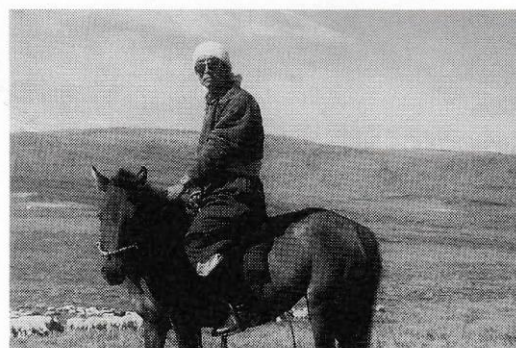


写真 14 乗馬しながら調査中の筆者





写真 15 正装した遊牧民の家族

鏡やアイラグ（馬乳酒）を詰めた水筒を携帯していた。

バイクに乗車していた牧民と出会ったこともあった。「ズラック・アフツ・ボロツホ」（写真を撮っても良いですか）とカメラを向けると少し待ってくださいといって正装してきた遊牧民家族もいた（写真 15）。植物を手にとっていた遊牧民に会ったので利用法を聞いてみると、薬用として利用するという。歯の痛みを柔らげる葉（テメンソール）や腎臓に良いという赤い実（デイヒンシャイク）があることを教えてくれた。

また、話しが食に関することに及んだとき、日本人はへびを食用にするのかと質問してきた遊牧民もいた。

## 12. 遊牧民のフェルト作り

8月、天気の良い日にフェルト作りが行われた。炎天下に、近所の人たちが総出で仕上げていた。まず、刈り採った羊毛を細い鉄の棒で叩き、柔らかかにしていた（写真 16）。次に、数枚の大きな皮を広げ、柔らかくほぐした羊毛を敷きつめる。その上に水を少しづつかけて、すき間のないように並べた（写真 17）。すべて手作業であった。さらに、敷きつめた羊毛に心棒を通して、なかの水分をしぼり出す作業が行われた（写真 18）。最後は車



写真 16 羊毛を細い鉄の棒で柔らかくする



写真 17 柔らかくほぐした羊毛をしきつめる作業



写真 18 羊毛中の水分をしぼり出す作業

で引かせるころがす作業を何回も行うそうだ。モンゴル在来ヒツジの毛は太く、フェルト作りには好都合らしい。

（つづく）

☆ ☆ ☆ ☆

## モンゴル遊牧民と過ごした日々 IV

苗川 博 史 (Hirofumi Naekawa)  
湘南工科大学附属高等学校

### 13. モンゴル草原のヒツジ

ヒツジは、モンゴル全土で1999年現在約1,420万頭飼育されており、5家畜（ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダ）の約4割を占め、年々微増しているという。遊牧民が提供する羊肉は、ウランバートル市内で1.2ドル/kg、毛皮は約5ドル/頭で売りに出されていた。カーペット（5×2m幅）は、7～10ドル/kgで売買されるという。カーペットは、良質なものの乾燥後に小さくなり、そうでないものとの間に見た目と大きさに違いがあるという。

モンゴルヒツジは、脂尾羊であり、尾に多量の脂肪を蓄えて厳冬の環境に適応し、乳、肉、毛、皮として利用されてきた。調査した個体の体色は白色をベースに頭部、頸部または目の周囲が黒色や茶色の部分色で覆われているもの（写真19）、さらには、有角の個体が

多く見受けられた。モンゴルヒツジは、見慣れたサフォークに比べて華奢な感じのする体型であるが、起伏の激しい山間部や砂漠地帯など足場の悪い地帯を歩くため、足腰がしっかりしている。

今回の夏営地では、遊牧民による羊毛刈りを初めて見る機会があった（写真20）。羊毛は年2回刈り、夏営地では、オホル（短毛）刈りと呼んでいた。毛刈り作業は、ヒツジを捕獲固定したのち、1頭1頭ハサミを用いて行っていた。

またサンサル村の獣医師の指導のもとに、薬の投与を全頭に行っていた（写真21）。薬を投与したヒツジには、背中に牛糞でマークし投与していない個体と区別し、重複投与しないよう注意深く作業をしていた。この時期の薬の投与は、家畜乳からヒトに感染する骨の病気対策だという。



写真 19 モンゴルヒツジ



写真 20 羊毛刈り



写真 21 葉の投与

#### 14. ゾド（大雪害）後の夏営地

2000年の冬、モンゴル草原では、数十年ぶりにゾドと呼ばれる大雪害があり、日本の新聞でも大きく報じられた。雪が凍りつき、家畜たちが蹄で草を掘り出せないまま飢え死にしてゆく状況を「ゾド」と呼ぶ。被害が最も大きかったといわれるウブルハンガイ県ブルト村の夏営地で2000年度の調査を行ったので、訪れた遊牧民に直接尋ねてみた。

ダントさん（写真22左）所有の家畜約1,000頭の半数は、ゾドによる被害で死滅したという。具体例をあげれば、ウシ60頭が8頭に、ウマ150頭が97頭に、ヒツジ600頭が約300頭へ、ヤギは200頭が約100頭にそれぞれ減少したと話してくれた。

ゾドは、前年の12月から5月まで半年続き、期間中の最低気温は、 $-45^{\circ}\text{C}$ にもなった



写真 22 ダントさん（左）右はホッスルワンさん

という。積雪は、最大20数cmであり、根雪が絶えず10cmあったという。アイスバーン下のわずかな草を蹄で穿って食べざるを得ない家畜にとっては、ことのほか飢えに追い込まれ、寒さと併せて多くの犠牲が出たものと考えられる。ウシの被害が大きかったのは、長い舌を草に巻き付けて摂取することが困難だったからだと思われられる。ダントさんは、約30年前にも同じような経験があり、今回生まれて2度目の光景だったという。ゲルから少し離れたモッドと呼ぶ樹木の中にゾドで死んだ家畜の亡骸がうずたかく1箇所に積み上げられていた（写真23）。調査中にも、ゾドの影響と思われる家畜の亡骸が草原の所々に見られた。

ゾドによる影響で、夏営地は、ホッスルワンさん（写真22右）と息子のボルトさん、それにダントさんの3家族が共同生活していた。ゾドによる影響のためアイラグ（馬乳酒）やアルヒ（牛乳酒）の生産量は、3家族合わせても例年に比べて少ないという。

市場経済後の遊牧民の生活は、ゾドの心配を除けば年々向上しており、現在の遊牧生活は、自分たちのアイデアが日々の生活に反映された喜びと生き甲斐を感じているという。また将来の生活に対しても限らない発展と夢



写真 23 ゾドによる家畜の死骸

を抱いているようだった。

モンゴルの新聞ウランバートルポスト(2000.8.19)によれば、モンゴルの人口240万人のうち46.6%が20歳以下の若年層で占められている。

21世紀には、この若年層が台頭し生産人口の中に多くの遊牧民が再生産され、活気ある遊牧社会の姿が目に見え上ってくる思いがした。

### 15. 草原にいたる道

ウランバートルから夏営地にいたる間、道路を横切るヒツジを制御中の遊牧民と何度か遭遇した。草原の中に道路があるモンゴルの道路事情は決して良くない。アスファルト舗装した道路の所々に大きな陥没があり、放置されたままである。このことは、都市部と地方都市部を往来するバス、トラック、自家用車の往来の激しさの一面を物語っている。走行中には、ガソリン切れの車や、暑さでオーバーヒートしストップした車、パンク修理で停止中の車、ヒッチハイクする人など、様々な光景を目にした。市場経済後のモンゴルでは、車のオイルが高騰し、定期的に入らないガソリン事情のために道路上で車が立ち往生するらしい。

モンゴルへのアクセスは、私自身が6年前、成田空港から北京を経て2日ばかりで草原入りしたことを考えると、現在、大変便利になった。昨夏には、関西空港からウランバートルを経てブルト村までは、計11時間30分で行くことが出来、急速に変化する時代の流れを感じた。

6年前に、モンゴル調査のきっかけを与えてくれたのは、岩手医科大学の赤羽和久氏である。氏とコンタクトのあったミヤクダク博

士やロブサンジャブ教授を通じて、私もモンゴル入りすることが出来たのである。

調査に同行したモンゴル語通訳のバトドルグガ氏とドゴルドール氏(共に当時モンゴル国立大学)は、向学心旺盛で英語と日本語を短期間で習得するなど、非常に優秀な青年であった。

また、モンゴル国立大学のロブサンジャブ教授(言語学)との出会いは忘れることが出来ない。教授の自宅は、ウランバートル市内を見下ろす高台にあり、階上がゲルの形をした部屋になっていた。調査前後には、いつも貴重なアドバイスをいただいた。ミヤクダク博士とは隣り合わせに住んでおり、古くからの知人である。最初の調査のときから、必ず教授宅に立ち寄らせていただいたが、残念なことに一昨年、病気で亡くなられてしまった。

ミヤクダク博士とその家族には、調査研究のみならず、モンゴルでの生活に便宜をはかっていただいた。特に、ミヤクダク博士には、国の研究機関の研究者として要職にありながら、時間を割いて調査に同行し、教えていただくが多かった。

### おわりに

これまでの調査を通して、モンゴル遊牧体系におけるヒツジと遊牧民との相互関係やモンゴルヒツジの行動調査は、私個人にとって残された人生をかけても価値ある研究対象であると考えている。モンゴル調査に際しては、私学研修福祉会、藤原ナチュラルヒストリー財団、在来家畜研究会より研究助成の一部を得た。続編は、機会を改めてまとめてみたい。

(了)

## 続 モンゴル遊牧民と過ごした日々

苗川 博 史 (Hirofumi Naekawa)

東京学芸大学大学院教育学研究科・理科教育・生物学

### 1. 4年ぶりのモンゴル草原へ

モンゴル国ウブスハンガイ県ブルト村の夏営地へ羊の行動調査のため4年ぶりに出かけた。今回で8回目の訪問となった。

夏営地は、前回は訪れた遊牧民のポルトファミリーのゲルである。羊450頭、山羊220頭を所有しており、以前訪れたときと比べ、山羊の増加が際だっていた。山羊の増加は、カシミヤ需要のためであるという。

モンゴル国は、人間活動による家畜の遊牧と野生動植物との共存を長い間実現してきた草原の国である。また、最新の保全生態学が主張する望ましい持続的利用（自然を利用しながら、自然を損わずに利用）を数千年にわたり実現してきた国でもある。

しかし、近年のモンゴル国は、高級素材カシミヤの原毛を生産する山羊の頭数が市場経

済化した1990年を境に急増しており、山羊の増加が草原の荒廃に繋がりがねない環境問題となっている。

羊と山羊には食草行動に違いがある。羊は草本を主とし、山羊は草本を根元から引き抜くように食べるため、植生への負荷が大きい。山羊は草本（芳香性含む）と樹木の芽・葉・枝・皮等を採食し、食草の種類も多く種の多様性低下が危惧されている。調査地の草原の一部では砂漠化が始まっていた（写真1）。

山羊増加の背景には、日本の経済援助でカシミヤ工場が操業を開始し、モンゴル国にとってカシミヤは重要な外貨獲得の生産物となっていることがあげられる。自由主義経済に移行してからのモンゴル国では、個人事業主となった遊牧民にとって、山羊は貴重な現金収入源となった。

2003～2004年には、モンゴル遊牧史上初めて山羊の頭数が羊を上回り、2008年には、羊と山羊の頭数の割合が1:1となった（表1）。

カシミヤ原毛は越冬時に生える産毛であり、生産量は3,000t/年とされる。山羊1頭からの産毛は、250g/年であり、セーター1着では山羊4頭分が必要とされる。そのセーターやコートは、主に中国、日本、アメリカ

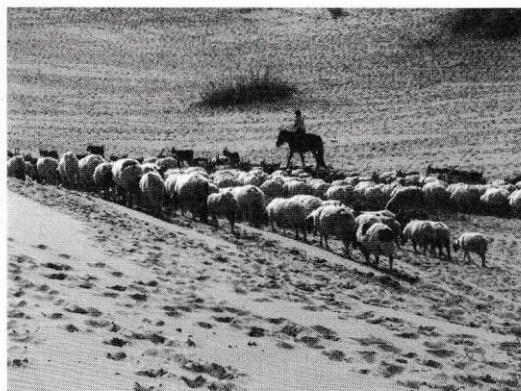


写真1 調査地の一部草原で進む砂漠化

表1 モンゴル国における羊と山羊の飼養頭数の推移(2008)

	単位：千		
	1989年	1997年	2008年
羊	14,265.2	14,165.5	18,362.3
山羊	4,959.1	10,265.2	19,969.3
羊：山羊	7:3	6:4	1:1

資料はモンゴル国ミヤクダダク博士提供による。

などで消費されている。

一方で金採掘による環境破壊が牧草の減少へと繋がっているともいわれ、草本の多い場所に遊牧民が集中する傾向にある。結果として過放牧に繋がっていくという悪循環も指摘されている。

調査に同行したミヤクダダク博士によると一遊牧民における山羊の所有頭数の上限は全家畜の30%とすることが政府のポリシーとして決められたそうである。今後、山羊の飼養頭数がこれ以上増加していくならば、カシミヤのコストを低くして抑制することを、2008年に全モンゴルの研究者が一堂に会した草原劣化についての会議で決定されたそうである。

山羊を増加して集中的に草原を利用しているモンゴル国において、草原生態系の現状と、その近未来の持続的利用について考察することは、私たち日本人のみならず、全世界の人たちが注目する必要があると考えた。また、教育現場においても、草原劣化を事例とした環境教育の教材化の必要性と、環境問題が他国との関係で成立していることの認識の重要性を展開していく必要があると考えた。今後、モンゴル国における環境教育及び環境保全のありかたについても思いを巡らしていきたいと考えた。

## 2. 羊群の鳴き声と群行動

大群の家畜の飼育を可能にするモンゴル国の遊牧においては、群の支配のために相互に

争う雄の影響を排除し、群の安定を維持するため、出生後の雄は去勢されるか間引きされ、夏営地の羊群は母子系列の社会で構成される。これまでモンゴル

国における羊群の社会構造や、鳴き声について論じられた研究は、本研究者らの調査及び報告を除き、先行研究が限られており、継続した研究成果が求められている。今回の調査は、モンゴル羊群の行動と鳴き声の特徴について検討することを目的とした。

調査は10日間行い、調査の前半は、羊の鳴き声を任意に抽出する方法であり、調査の後半は、1時間ごとに最初の10分間を連続して鳴き声を記録するという方法である。調査項目は、鳴いた個体が群中のどの位置(前、中、後)で、どの個体または群に対して(発声対象)、どの行動形のときであるかを、肉眼観察及びVTRカメラでそれぞれ記録した。調査は、羊群がキャンプ地を出発してから再びキャンプ地に戻るまでの間、群と行動を共にしながら、車を併用して行った。

羊群の行動形は、キャンプ地を出発して再び戻るまでを移動、移動・食草(移動が主であり、食草が従)、食草、食草・移動(食草が主であり、移動が従)、休息の5つに分類して行った。

調査の結果、群中における母子羊の発声回数は、発声時の行動形によって有意差が認められた(表2)。また母子羊の発声は、移動中に最も多く、休息中に最も少なかった。さらには、母子羊の発声は、群の後位置や中位置で多く、前位置では少ない傾向にあったが、母子羊の発声回数に対する発声位置の影響は有意ではなかった。母子羊の発声対象は、

表2 母子羊群の行動形と発声位置、発声対象

発声位置 行動形	前位置	中位置	後位置	合計	発声対象 群(母+子)
移動	母 57	母 78	母 131	母 266 <sup>ac</sup>	母 111
	子 54	子 84	子 148	子 286 <sup>bd</sup>	子 102
					群 164 + 175
移動/食草	母 34	母 77	母 74	母 185	母 96
	子 17	子 93	子 53	子 163	子 115
					群 70 + 67
食草/移動	母 28	母 16 Ewe	母 7	母 51	母 32
	子 5	子 25 Lamb	子 26	子 56 <sup>b</sup>	子 45
					群 6 + 24
食草	母 16	母 25	母 37	母 78 <sup>a</sup>	母 74
	子 8	子 41	子 34	子 83	子 59
					群 19 + 9
休息	母 13	母 8	母 1	母 22 <sup>c</sup>	母 29
	子 16	子 12	子 1	子 29 <sup>d</sup>	子 21
					群 1
合計	母 148	母 204	母 250	母 602	母 342
	子 100	子 255	子 262	子 617	子 342
					群 535

数字は音声解析数：Tukey-Kramer法の多重比較検定 同符号間に有意差 (P < 0.05) あり。

個体（母羊または子羊）と群に分けることが出来、群よりも個体（母羊または子羊）に対しての方が頻度が高かったが、両者に対する母子羊の発声回数の差は有意ではなかった。

母子羊間の発声は、移動中に頻繁に見られたが、これらの行動中に母子羊が離れたり、移動中の他個体が母子羊の間に割り込むなど、視覚的に互いに認知出来ないことが多いため、お互いに対する発声と応答頻度が高くなったことによるものと考えられた。また、



写真2 母子羊は互いの存在を確かめながら鳴き交わし合い移動する

本調査で観察出来た母子羊の発声のほとんどは開口声であり、食草・移動中及び食草中における母子羊間の発声時間は、1秒以上と他の行動形よりも長かった。この理由としては、食草・移動中及び食草中には、母子羊共に視覚的な注意は採食に向けられるため、母子羊は長い音声でコミュニケーションを維持しているものと考えられた。

モンゴル草原の夏営地における羊の群行動と鳴き声の特徴としては、キャンプ地を出発後に母子羊間で互いの存在を確かめながら鳴き交わし合い、特に移動や食草時において絶えず母子羊間で鳴き交わし（写真2）、互いの情報や群の位置を確かめていることが明らかになった。群をつくる羊群では、母子羊間で発声と応答を繰り返しているが、そのことが群全体に情報を伝えた結果、群全体としての行動を統一させているのに役立っている可能性も考えられた。

### 3. 遊牧民の生活向上と意識の変化

今回、草原を訪れて驚いたことがいくつかあった。

1つめは、遊牧民の生活が、これまでのローソクから太陽熱の充電利用により電化されたことである。ゲル内には、白熱電球、液晶のカラーテレビが置かれ、携帯電話も常設されるなど、移り行く時代の流れを感じた。ゲル内で韓国の恋愛映画や日本の大相撲が見られることなどは、予想出来なかったことであった。特に携帯電話を通して草原で仕事中的家族や、首都ウランバートルの親戚との間で連絡が取れるようになったことは、通信手段の格段の進歩である。あえて不自由な生活と思いを覚悟して出かけた私にとっては、いささか気落ちしてしまった感があった。

2つめは、遊牧民の生活水源近くにキャンプを設営する人たちが都市部から現われ、遊牧民の生活用水の汚染が懸念されたことである。事実、遊牧民がキャンパーに対して何度か注意していたのを見かけることがあった。また、大手旅行会社の旅行者用ゲル（写真3）が遊牧民の草原近くに今年から設営された。今後、このようなキャンパーや旅行者用ゲルが増加していけば、遊牧民を取り巻く光景や生活も、徐々に変容していくに違いないと考えられた。

1995年調査の際、大人になったら遊牧民になると話してくれた少年は（シーブジャパン誌、NO. 35, 2000年で紹介）、両親や親族の経済援助のために現在日本で働いていることが分かり、遊牧民の後継者のことを考えたとき、残念な気持ちになった。

都市部でも変化が起きていた。ウランバートル市民の服装は、今回訪れたとき民族服のデール姿が殆ど見られず、特に若者のファッションは著しく変化した。日常的に行きかうネット社会の情報が、モンゴル草原にも確実に浸透していた。しかし、変わらないことはといえば、ウランバートルから草原へ向かう途中の悪い道路事情であった。約30kmの迂回道路が続き、1995年に初めてモンゴル国を訪れたときと同じ状態であった。

都市と地方を結ぶ幹線道路は限られており、大雨による道路への浸水で路面に亀裂が生じ、瞬間に道路のいたるところに穴が生じてしまっていた。背景には、都市と草原を結ぶ物流の往来の激しさがあることを物語っており、車の増加が路面亀裂に拍車をかけていると思われた。

モンゴル国の近代化と生活向上のための合理化、そして電化された草原生活と遊牧民の意識は今後どのように変貌していくのだろうかと思案しながら帰国の途に着いた。



写真3 遊牧民のゲル近くに設営された旅行会社のゲル



## 思い出の旅の旅行記

モンゴルの旅の思い出を書いて頂きました。いったいどんな旅だったんでしょうか。

### 「モンゴル遊牧民と過ごした日々」

—ゲル内にて—

理科 苗川博史

遊牧民による伝統的な家畜羊の管理や行動を、この目で観察してみたという夢が、この八月、モンゴル

遊牧民と過ごすことで実現した。モンゴルへ向かう途中、機上から見たゴビ砂漠は、鉄錆色に地肌をあらわしていた。私は、果てしなく続く荒涼とした砂漠に生息する生物や、この先に出現するであろう草原に思いを馳せ、心が高なるのを感じた。モ

ンゴルの首都ウランバートルは、草原のなかにあり、空港に降り立った時、夕方5時であるというのに、陽射しがとても強く、濃紺の空に流れゆく大きな雲が印象的であった。草原へは、モンゴル農用家畜研究所のミヤクダク博士とその家族、モンゴル国立大学生のバトドルグ氏が同行した。市内から車で30分程すると、見渡す限りの草原だけに変わった。遊牧民が乗馬しながら羊群を制御する光景があちらこちらに見られ、また休憩地点ではヤクの一群を見ることができ、異国にきたことを実感した。市内から約250kmにあるウルハンガイ県ブルト村の遊牧民ホッスルワンさんとその親族の夏営地に着いたのは、薄暮時の午後9時半過ぎであった。「サインバイノー」、覚えてたのモンゴル語で挨拶を交わし、ゲル(円形テント式住居)の中へ入った。ミヤクダク博士とホッスルワンさんは兄弟の関係でありながら、嗅ぎタバコで互いの親交をはかっていた。その後、小さな器に注がれたモンゴル酒を右手親指と薬指で、天にはじきながら何かを唱えていた。聞いてみると、①天のために②土のために③ここにいる人々の健康と幸福のためにということであった。さらに、スーアルヒ(牛乳のアルコール)が出され、最後にアイラグ(馬乳酒)がどんぶり一杯に注がれた。私は飲み慣れないスーアルヒとアイラグを少しずつ飲み干した。翌朝、私の宿泊するゲルを設営してくれた。ゲルの入口は、すべて南側に決まっているという。これは風よけのためであるらしい。設営の日には、ホロスコープでいうと縁起が良いとのことであった。設営は、ゲルの中心にホッシュという木を立て、ナラスという棒で組み合わせ、周囲をフェルトと布地で巻きつけ約3時間で完成した。ゲルの大きさは、直径が6m、高さが2m20×30cmであった。中央の天井部には、ストープを焚く時の逃げ窓のような穴があり、夜間や雨天時には閉じていた。遊牧民は、新しいゲルをたてた後、民族衣装の新しいゲルを身にまとい儀式を行なう。私が初めてこのゲルを着た時、老婆が次の順序で呪文を唱えた。南側からゲルを右手前へ手で引き①「小馬を踏む」、北側からゲルを右後へ手で引き②「羊を踏む」、最後にゲルを内側に手で引き③「手と口の脂肪を踏む」。それぞれにいわれがあるらしい。もてなしの料理としてタドガシールとい

う羊の頭部の肉料理が出された。羊の肉をカットするのは、年長者が行かない、若い人のカットは認められない。モンゴル人は、正月にこの料理を家族で食べるという。肉の各部それぞれに食べる人の区別や慣習があることを教えてくれた。それによると、耳は子供に与える。特に上顎は娘のみであり、将来子供を生むために遺伝するからだという。2つの眼球は、1人で食べなければならぬという。もし、1つしか食べないと目が悪くなると遊牧民はいう。鼻は食べない。食べればいつも鼻水が出るからだという。また、バートルホックという頭部は食べない。もし食べれば獣が近づいて強い動物と出会い、大変危険だからだという。このように食に関する言い伝えやタブーのような慣習が残されていることを知った。滞在中、遊牧民は草原のリスに似た哺乳動物タルバガンを狩猟し、その肉を石焼きにするポートルグ料理を私に食べさせてくれた。肉と乳製品の毎日の食事の中で、タルバガンのポートルグ料理だけは、何故か心に残った。遊牧民は、子供から大人まで、じつに良く馬乳酒を飲む。飲むというより食べているように私には思えた。毎日、大人10ℓ、子供

2ℓ位飲むという。仕事や儀式、ホルダツホという日本のジャンケンに似た指遊びの後にも、必ず飲んでいった。また、遊牧民はよく歌を唱う。日本の民謡のような抑揚で子供も大人も唱っていた。歌の内容を尋ねると、母に関するものが一番多く、次いで馬、3番目に父に関するものであるという。母の存在は偉大なだろう。高校時代に読んだパールバックの「大地」を思いおこした。日本の歌を聞かせてくれというので「知床旅情」などを唱った。ロウソクを灯して唱うゲルの夜は、いつしか学生時代にテント生活をして友人達と過ごした日々と重なった。毎晩寝る前にゲルの外で仰ぎ見たテンジンザウルス(天の川)は、手に届きそうに圧倒された。真夜中には、狼が出没し、羊が2頭襲われ、人も大自然の中で生かされていることを肌で感じた。遊牧民と過ごして驚いたことがある。彼らは、時計やカレンダーをもたない。ゲルの天窓から射しこむ光の角度、位置、明るさなどにより、人との約束や家畜を世話する時刻を判断し行動していたのである。円は、人の動線や自然のリズムを機能させる。円は縁でもある。ダヒイン オールサイヤ



写真：ゲルの前で遊牧民らと。乗馬しているのは筆者。

モンゴル草原への旅

理科教諭 苗川博史

帰れるから旅は楽しいのであり旅の寂しさを楽しめるのもわが家にいつかは戻れるからである。だから駅前

高見 順

勤務の傍ら、二十二年前よりヒツジの音声と行動をライフワークに研究を始めました。これまでに国内の北海道をはじめ、茨城県、静岡県、神奈川県内の牧場や生産農家を訪ね歩き、七年前からはモンゴル草原で調査を行ってきました。

本研究を始めたのは、教師になつてから七年目に専門の知識や技能に裏打ちされた指導、その研究姿勢を生徒に寄与したいと考え



(写真1)モンゴル草原のゲルと家畜

たのが、出発点となっております。学生時代から問題意識にあった動物の行動を研究することになり、その中でもヒツジを対象に研究を始めたのは、全くの偶然で広島大学名誉教授の三村耕先生との出会いがきっかけとなりました。その後、国内のヒツジの研究調査を重ねていくうちに、いつの日か海外調査をしたいという夢を抱き続けてきました。七年前に、研究が思いもせぬ方向へ展開していききました。モンゴル草原での調査が可能になったのは、岩手医科大学の赤羽和久先生からの紹介によって、現地研究者とコンタクトがとれ、遊牧民の中に入ることができました。研究を続けたこと、また研究を通して人との出会いなどが、道を切り開き、夢の実現へとつながっていききました。

モンゴル草原の中に浮かぶゲル



(写真2)ヒツジの肉を調理する

(移動式住居)と家畜の姿は牧歌的で、旅情を誘われるかもしれません(写真1)。しかし、その裏には苛酷な生活があります。滞在中にカルチヤーシヨックを受けたのは、食生活でした。食事は、目の前のヒツジ(写真2)、ヤギ、ウマ、ウシの乳、肉製品のみです。この時ほど日本の食生活の豊かさや贅沢さに思いをめぐらしたことはありませんでした。何よりも一杯の冷たい水が飲めたらということに強く感じました。現地での食生活に順応できたのは、食べなければ生きていけないこと、またいつかは帰る所がある研究調査であるということに支えられていたためかも知れません。

旅

『続・モンゴル遊牧民と過ごした日々』  
理科教諭 苗川 博史

昨年春にモンゴル各地で発生した火災は、キャンパーの火の不始末が直接の原因であったという。ロシアから火の手が上がったというウランバートル市民の声もあるが、このへんは俄かに信じ難い。いずれにしても、モンゴルでは近代化とともに、ここ一二年に人々が国内各地を自由に移動し始めていることを、この火災から知ることができた。

昨年八月に、再び一昨年と同じ遊牧民の夏営地を訪ねた。夏営地は、草原の火災の影響は全くなかったものの、春から続く乾燥小雨のため、草の生育が悪く、一昨年のキャンブ地から北西方向一〇kmに移動していた。遊牧民には定住地がない。あるとしたら同一県内に定住するということ位だろう。良質の草をひたすら追い求めて季節ごとに家畜動物とともに移動するから定住地がないのは当然であろう。郵便物は、まず届かない。代理人に依頼して届けてもらうしかない。一昨年、私が撮影したスナップ写真は、遊牧民のゲルの写真棚に収められていた。同行したミヤクダク博士が届けてくれたのだ

という。

現地では、調査や観察ばかりに明け暮れていたのではない。遊牧民の一員として、まき拾いや水くみ、家畜の世話以外に、他のゲルの遊牧民とのつき合いにも、機会をみて顔を出さなければならぬ。今回、ミヤクダク博士の甥の結婚式に招待された。訪れた八月は、遊牧民の結婚式が集中する季節である。これは、遊牧民の生活サイクルの中で、また、その後の子育てにも都合なのだという。式・披露宴は、隣の村の新郎新婦の真新しいゲル内で行われた。

ゲル内の入口から向かって左が新郎側、右が新婦側であり、新郎の左側にラマ僧が位置し、彼らの前にはヒツジの頭肉や硬いパンなどが、うず高く積み重ねられていた(図)。私たちがゲルに着いたとき、総勢四〇〜五〇人位が集まっただろうか。参加者は新郎新婦に近いところから年齢順に座っていた。すでにラマ僧からの祝詞が終り、式はアルコール(ツアイ・アイラグ、アルヒの三種類)を全員が飲むことから始まった。その後、参加者全員から思い思いのプレゼン

トが新郎新婦にあり、頬を寄せたり、一言二言何かを囁いたりしていた。一人の遊牧民が長い詩を朗読した。ゴイモン(うどん)を一同で食べた

後は歌が参加者から切れ間なく続いた。祝歌は、新郎新婦が将来の生活について、また参加者のそれは、ウマ、母、祖母、野生動物についての内容のものであり、全員が唱和しゲル内に響きわたった。祝辞の中に「シネ・ヌフル・エフネル・バヤール・ハルグイ」(新郎新婦おめでとうございませう)が何度もあり、私には「死ね！」としか聞こえなく、ヒヤリングの難しさを何度も味わった。また私の自己紹介のとき、「ピ・ヤボンノス・イルツスン・ナマイグ・ナエカワ・ケテック」(私は日本からきた苗川ともうします)というところを、「ナマイキ・ナエカワ」と言い損ないそうになったこともあり、モンゴル語の難しさを感じた。

休憩時にゲルの外へ出ると、何人かの遊牧民が「日本人を見るのは初めてだ」といって私の回りに集まってきた。彼らの真剣な眼差しや表情に、過ぎ去った日の日本人の姿が重なった。少年の中には涙垂れがいて、少年時代の頃、近所にいた悪ガキたちを思い出してしまった。



図：宴が行われたゲル内

宴は、歌とアルコール、新郎新婦に捧げる祝辞が七日間も続くというので驚いた。宴は、来る者拒まずで、誰でも何時でもゲル内に入ってよいことになっている。もし、私が全く知らない宴のゲル内に飛び込んでも歓迎してくれるというあたり、慣習とはいえモンゴル人の懐の深さを感じた。モンゴルでは、男性から女性に結婚を申し込み、その逆は認められないという。ただし、男性から申し込まれた女性は拒否する事はできないらしい。一方的ではないようだ。今回の新郎は二二歳、新婦は二〇歳である。サンサル村に新郎が買物に出かけた時、店員であった現在の新婦と知り合ったという。新婦は、ミスカーが似合う都会育ちという印象をもったが、両親は遊牧民であ

り、この先、新郎に尽くして遊牧民生活を全うしようという決意のようなものが読みとれた。現在、ウランバートル市内のシネマで、日本の「おしん」の映画が放映され、老若男女を問わず、その評価が高いという。このあたり、モンゴル女性の生き方や男女のあり方が、モンゴル人の国民性として投影されている気がした。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
調査の合間に、遊牧民のツンツェルン君という一六歳の少年に、現在の生活や将来の事について聞いてみた。友人と会えるから、学校生活の方が遊牧民生活よりも楽しい。しかし、将来は遊牧民になるという。滞在中に出会った遊牧民の少年たちのほとんどは将来、遊牧民として生きていくことに誇りをもっていた。彼らは、モンゴル家畜の中で、特にウマが大好きである。ウマは速いしどこへでも行くことができるからだという。そういえば5、6歳位の少年から乗馬しているのを見かけた。ウマは遊牧民にとって大事な生活の足であり、食肉にすることはない。モンゴルの教育のことや遊牧民の子どものたちの生活のことが気になったので、さらに聞いてみた。六、八月は家族と共にゲルで過ごし、九、一二

月は、ここから四五km離れたサンサル村の学校寄宿舎に入って勉強する。冬休みは一、二月で、再び家族の元へ戻り二、五月は寄宿舎へ行くという。彼は、学校では、スポーツ、歴史、文学が楽しいという。日本についてはアジアの中の小さい国であること、日本の子どもたちが今、何をしているのか知らないと話してくれた。相撲のことはウランバートル市内のテレビで、侍のことはシネマで見知っていた。テレビゲームもウランバートル市内で行なったことがある。遊牧民は、年に何回かウランバートル市内に出かけるようだ。こうした文明の影響を幾たびが受けていると、遊牧民生活を持続していくことが難しくなるのではと感じた。スルンという一七歳の少女は、現在の遊牧民生活は難しく、将来は化学者になりたく、高校・大学進学を考えているという。次世代の中にも、遊牧民となる者、都市部に出て生活する者と二極に分かれていくものと思われた。

都市部の生活者は、夏になるとほとんどが一時的にせよ、カントリースайдに出かける。都市部の経済生活が厳しいということも反映していると考えるが、もともとモンゴル人



結婚式・披露宴に集まった人たち。1つのゲル内にこれだけの人たちが収まっていたのは驚きである。新郎新婦は後から2列目、中央部。新郎の前にラマ僧の姿がみえる。筆者は後2列右から3番目。

## 続々 モンゴル遊牧民と過ごした日々

理科教諭 苗川 博史

遊牧民は、季節毎に家畜動物と共に良質な草を求めて住居を移動する。昨年、訪れた遊牧民の夏営地

は、一昨年の場所から北へ約三〇キロメートルの他県へ移動していた。草原の移動はこれまで同一県内と決

### 前ページからの続き

の血の中に、定住しない遊牧生活が染みわたっていることを感じる。

今後、モンゴルが近代国家へと脱皮し、都市部と地方都市との人々の往来が激しくなったとしても、乳と肉製品の食習慣で支えられている国民性が続く限り、遊牧民は再生産さ

れ続けていくことだろう。現在、経済不況で国内が揺れているモンゴル国内は、観光客対象の通訳者の人気

が都市部の若者の間で急上昇である。特に、日本語熱はすさまじいものがあることを同行したモンゴルの大学生から伺うことができた。(続く)

められていたが、他県へ移動できる法が改正されたらしく、移動範囲が広まった。住所が定かでない遊牧民の居所を突き止めるのは容易なことではない。移動したゲルを訪ねた際、同行したミヤクダク氏(モンゴル研究者)が途中、何人もの遊牧

民に居所を聞いていた。遊牧民は指で方向を示し、「その人ならこの方向に住んでいるよ」と居所を知っていたのは驚きだった。しかもそのゲルから何キロメートルも離れていたにも関わらずである。乗馬しながら生活する遊牧民にとっては、彼らの

行動範囲の中に、訪ねた遊牧民も入っているものと思われた。遊牧民の生活は、年々家財道具が増えることもなく、質素であった。必要最低限の生活用具しか所持しない。ゲル内には、簡易ベッドとわずかな生活用具があるだけである。またゲルには、電気・ガス・水道・バス・トイレがない。毎日の生活用水としての水は、近くの小川の水を汲み調達する。その水で顔や体を洗い口をすすぎ炊事を行った。炊事や暖房の燃料には草原の枯れ木とウシの糞を用いた。家畜の糞の中ではウシが一番火力があるからだ。トイレは、ゲルから少し離れた草原上に、各自が日々場所を変えていた。ステップ型気候に位置するモンゴル草原は、家畜・ヒトの排出物がすぐ乾燥してしまい、匂いはなかった。植物―動物―ヒトという自然の循環の中で、実に合理的に生業を営んでいることがわかる。遊牧民は、トイレ時にペーパーは使用せず、おそらく草を用いていたのではないだろうか、生活の中で紙類は、ほとんど見かけなかった。時折、古新聞があると、それはタバコの刻みを巻き付けるためであったりする。また、遊牧民が川で体を洗っている姿も見ることがなかつ

た。訪れた遊牧民は、五人家族で構成され、羊五六〇頭、山羊一二〇頭、馬七八頭、ウシ三〇頭を飼養していた。遊牧民の家畜の所有規模としては、標準であるという。主人は、家畜一頭一頭の性別、年齢等を覚えており、調査時に頭数や年齢を尋ねた時に、即座に応答したのには驚いた。理由を聞くと、家畜と毎日接触しているからで、全て頭の中に入っているからだという。とにかく記録することを見たことがなかっただけに、記憶力の凄さには、目を見張るものがあった。このことは、遊牧民が記録に止めない民族の歴史であったことを思えば、ごく自然の成り行きなのかも知れないなどと思えた。遊牧民の一日は、日の出とともに始まる。女たちは、先に起きてまずウシの搾乳をする。男たちは草原に散らばっている馬の群をゲルに連れ戻した後、馬の搾乳をする。大人も子供も、朝から晩まで実に良く働く。日中は、燃料集めから、牧畜の管理作業、炊事などで、日の入りとともに作業を終了し、明日に備える。全て自然態で日々が終わる。

今回の調査の主目的は、羊群の行動を解析することであった。羊が、いつどこで何をしているか、またそれはどのような意味を持つのかについて考察することである。毎朝、羊は山羊と共にゲルから草原へ、誰からも指示されることなく食草のため移動していく。柵のない遊牧生活は、自由気ままに移動していくように見えるが、遊牧民によって途中コントロールされてゲルに戻って来るというしくみだ。羊群の中に山羊を入れて管理することは、山羊が羊群をリードする習性を利用して古くから行われている方法である。羊と山羊の数にバラツキがあることを主人に尋ねた。山羊は羊群の中に約二割いると群がまとまりやすいという。出発時は羊が先導、山羊が後続し、帰りは、山羊群が先導した。出発時を除き、移動中は山羊が先導した。羊、山羊は、一日平均一〇キロメートルの距離を移動しながら食草する。遊牧民はゲルから双眼鏡で遊牧中の家畜を観察し、時折、「ピー」と口笛を吹いたり、「チャオー」というかけ声で群の向きや移動を促していた。また、姿が見あたらないときや他の遊牧民の家畜群と混合しそうなときには、乗馬して出かけ、群の後部から制御していた。遊牧民は、家畜ごとにかげ声が異なってい

ることを観察した。羊に対しては「チャー」山羊に対しては「ズーズー」と使い分けていた。中でも大群に対しては「キシキシ」、小群に対しては「チャー」というかけ声であった。これらは移動させたり、集合させるための機能を持っていることがわかった。このような遊牧民による家畜群に対するかけ声には、遊牧民の間で共通点があることを、すでに文化人類学者らが報告している。「馬に乗ってみませんか」と突然すすめられた。学生時代に乗馬したことが若干あり、遊牧民と共に制御に加わる機会を持った。「チュー」という声で前進することを教わった以外は、自分で操ることができた。モングルの馬に日本人の心が伝わっただろうか。遊牧中の羊・山羊群の追跡調査は、徒歩を原則としたが、長距離を追跡するには、乗馬または車が便利であった。またモンゴルの強い陽射しと防寒には、帽子、サンダース、デール(民族服)、長靴が必要であった。モンゴル草原の朝夕は、ストープが必要な位に冷え込んだ。日中の気温は三〇度を越し、晴れているかと思えば、いきなり雷雨になるといふ変則的な天候であった。持ち物のザックの中はカメラ、

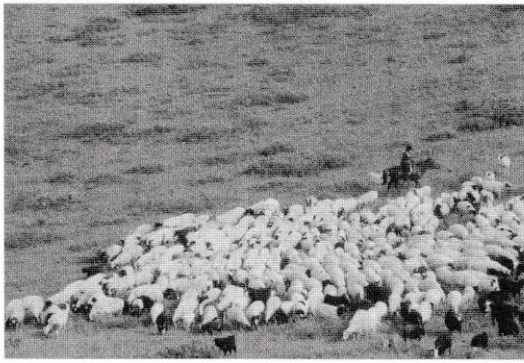


写真1 羊を制御する遊牧民

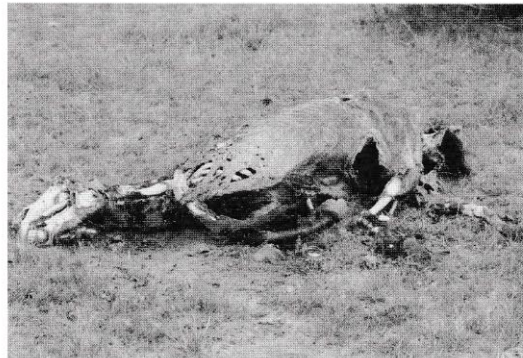
気象の測定具、筆記具、ノートなどを雨に備えビニールに包み詰め込んだ。調査中の食事は、アイラグ（馬乳酒）、ビスケットなどの菓子類、果物などの行動食である。羊・山羊は、一日の大半を食べることに費やす。あとは移動して休息するだけである。一見、単純なことのくり返しに見える行爲も、実際に観察し記録するとなると、かなり複雑である。羊の群を見ていると実に美しいと思うことがあった。美しいという漢字の中に、羊が存在することを考えた

(写真1)。羊が大群になると「美」、この「美」という漢字を最初に作った人はおそらく羊を観察して考え出したのだからと想像した。調査の合間に日本国内ではとうていみられない珍しい野生動物植物や、数多くの馬・羊などの白骨化した死体などを見かけた(写真2)。遊牧民の死生観は、このような光景を小さいときから日常接している中で、ごく自然に熟成されていくものと考えた。

モンゴルから日本に戻って感じたことは、モノが溢れ、食がいつでもどこでも何でも手に入り、口にすることができるといふ便利さ、ぜいたくさであった。生活の隅々まで文明の利器がはびこり、私達はぜいたくな生活に慣れきってしまった。この時代にモンゴル遊牧民のように家畜を生業にして文明から離れた生活をしている人々がいることを、特別な思いがしてモンゴル調査をふりかえって見た。定住して文化を作り出す民族と遊牧しつつ独自の文化を生み出す民族の違い、風土によってヒトの思考や生活スタイルなどが異なってくることに思いを巡らした。昨今の清潔好きな高校生を見るにつけモンゴルの衣・食・住にどれだけ耐えられるのだろうか、ふと考えてしま

った。モンゴル草原は空気が透明である。星のまたたきがない、風が優しい、人が優しい、全てが優しい。この優しさは、苛酷な自然下の中から生まれてくるものなのだろう。「厳しさの中から優しさが生まれる」、だから、遊牧民は初めての人にも誰でも手をさしのべることができるのだろう。司馬遼太郎は「天國に近い場所」と述べていたことを思い出した。言葉の真意はわからないがモンゴル草原にわずばかり滞在した体験から、理解できるような気がした。日本から単身で訪れたモンゴル。言葉の障害を乗り越え、好奇心と探求心、幾ばくかの体力・精神力で過ごした毎日であった。期間中、恐い思いをしたことが何度かあった。特に小石大の雹が降ってきてゲルをたたきつけたときは、生きた心

写真2 草原に横たわる馬の死骸



地がしなかった。このまま草原の中で濁流の彼方へと巻き込まれてしまうのではないかと思えた。北京空港でのタクシー運転手の強引な客引き、深夜におけるウランバートル空港で白タクの2人組に出会ったことなど、今思えばぞつとすることがあった。人は現実の中でよりも、想像の中で恐怖心が助長される。食習慣の違いから、2度と訪れまいと思つたモンゴル。時が経つにつれ、不思議にまた出かけたくなる国がモンゴルである。今回のモンゴル調査をふりかえって、「人はおかれた状況や環境を通してしか物事を普遍化できない」という言葉を思い浮かべた。

